

日中両国語における擬音語の対照研究

— 小説『ノルウェイの森』とその三種の中国語訳本を中心に —

王 湘 榕

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

『人間文化創成科学論叢』第15巻（2012年）

2013年3月発行 抜刷

日中両国語における擬音語の対照研究

——小説『ノルウェイの森』とその三種の中国語訳本を中心に——

王 湘 榕*

A Comparison of Onomatopoeia in Japanese and Chinese

—Focusing on Japanese Novel “Norwegian Wood” and Three of It’s Translation—

O Shoyo

要旨

擬声詞存在於世界各種語言中，特別是日語的擬聲詞，其數量更是多於其他國家。根據資料顯示，日語中的擬聲詞，其數量為英語及漢語的3～5倍。本文通過比較日語小說及與其對應的3種中文譯本中擬聲詞的使用狀況，來探討漢語中的擬聲詞的數量遠少於日語中的擬聲詞的原因以及中日擬聲詞的特徵。

Keywords : Onomatopoeia, Japanese Novel, Chinese Translation, Xiang-Sheng-Ci, Kana

1. はじめに

日本語の特色の一つに擬音語・擬態語（オノマトペ）があり、文章をいきいきとさせる機能があると言われている。その数と形態は、世界中のほかの言語より豊富であるとされている。『暮らしのことは擬音・擬態語辞典』（山口仲美、講談社）によれば、日本語のオノマトペの数は欧米語や中国語の3倍から5倍もあるとされている¹。

本稿は、日本語のテキストに使用される擬音語とそれの中国語訳本を考察することにより、日中両国語における擬音語のそれぞれの特徴及び、中国語より日本語の擬音語の数が多い理由を明らかにする。

なお、擬音語は擬態語と共に論じられることが多いが、今回の考察は紙幅の関係で日本語の擬音語とそれの中国語訳に限定し、擬態語については別の機会で検討することにする。

2. 先行研究

2.1 日本語の擬音語の定義と特徴

日本語の擬音語は、数、形態共に豊富であると言われている。『擬音語・擬態語辞典』（浅野鶴子編、角川書店）では、人間や動物の声を擬えるものを擬声語とし、自然界、無生物の音を擬えるものを擬音語としている。本研究は便宜上、擬声語と擬音語を一括に擬音語と呼ぶことにする。また、日本語における擬音語の特徴については、文章を生き生きとさせる直感的な使い方以外に、動詞や形容詞の補助的な存在にもなるとされている²。言い換えれば、ほかの言語と比べて、日本語の動詞は大雑把な場合があるので、その場合、擬音語で表現をより細かく描写することがあると言える。

キーワード：擬音語、日本語小説、中国語訳本、象声詞、仮名

*平成21年度生 比較社会文化学専攻

2.2 中国語の擬音語（象声詞）の定義と特徴

中国語では擬音語のことを“象声詞”（以下、“”を外す）と言う。『現代漢語詞典』ではそれを“模擬事物的聲音的詞”（事物の音声を模倣する語）と説明している。つまり、自然の音響、人間や動物などの音声を言語音で模倣して写す表現であると言える。

中国語の象声詞の特徴について、瀬戸口律子（1984：3）は象声詞の“滴答（dī da）”が“屋頂上の雪化了，滴答（dī da）着水（屋根の雪がとけてぼたぼたとたれている）”というように、動詞の働きをすると指摘している。

また、象声詞の音韻については、瀬戸口（1984）では、「象声詞は殆どが第一声となるが、動詞の役割を果たす場合には第二音節が軽声に転化する」と指摘し、音韻の変化で象声詞の役割を変えることができるとしている。

2.3 日本語の擬音語と中国語の対照的研究

中国語の象声詞の数は日本語の擬音語より少ないため、翻訳する際に、象声詞で対応しきれないものが多いことはしばしば指摘されている。従って、擬音語の日中対照研究では、中国語は固有の象声詞以外に、如何なる品詞やフレーズを用いて日本語の擬音語に対応するかについて論じているものが多い。以下、代表的な研究を紹介する。

呉川（2002）は翻訳者の視点から、日本語の文学作品『雪国』に出現したオノマトペ224例とその三種の中国語訳の対応の妥当性を検討した。擬音語の場合、呉（2002）はそれを翻訳しやすいものと翻訳しにくいものの両方に分ける。翻訳しやすい擬音語は元々中国語ではそれに相当する象声詞があるので、訳者はそれを読者が理解しやすい物に翻訳することができる。（例：ごくごく→咕嘟咕嘟（gū du gū du））

一方、翻訳しにくいものは中国語ではそれに相当する象声詞がないため、翻訳する際に、無理して象声詞に訳すより、原文の意味をよく理解した上で、ほかの語彙に訳すのが理想的な翻訳方法であるとしている。

呉（2002）の理想的な翻訳方法という概念は徐一平（2010）によりさらに具体化された。徐（2010）は擬音語、擬態語の翻訳方法として、

- ①固有の象声詞に訳す ②原文に従って象声詞を作る ③適当にほかの言葉に訳す³ ④疊語に訳す ⑤「一然」の形に訳す ⑥「形況詞」に訳す ⑦象声詞の隠喩的用法に訳す ⑧一般形容詞に訳す ⑨副詞に訳す ⑩動詞に訳す ⑪「一下子」の形に訳す ⑫フレーズをもって意識する ⑬省略してもいい

などの翻訳法を提示したが、そのうち、擬音語に関連する翻訳法は主に①、②、③であるとしている。

以上に提示した13種類を用いて翻訳すれば、擬音語、擬態語の翻訳問題をある程度解決できるとしている。

3. 使用資料と分析方法

本稿では以上にまとめた先行研究を手掛かりに、日本語の擬音語とそれの中国語訳の対応関係を探るために、日本語の小説『ノルウェイの森』（講談社、2004）とそれの三種の中国語訳：頼明珠訳（時報文化出版社1997、以下中訳Aと略す）劉惠禎、黃琪玟、傅伯寧、黃翠娥、黃鈞浩訳（故郷出版社1989、以下中訳Bと略す）林少華訳（可筑書房⁴1992、以下中訳Cと略す）を用いて、日本語のテキストに出現した擬音語が中国語に翻訳される際の翻訳状況を調べることにした。

材料として『ノルウェイの森』を選んだのは、村上春樹の小説『ノルウェイの森』は海外の書店でもベストセラーに入るほど高い評価をされているため、複数の訳本があることと、中国語訳本の電子化データも出ているため参考にしやすいといった理由からである。

データの収集では、まず『ノルウェイの森』の原文から擬音語を含む部分を抽出し、訳文からそれに対応する部分を探し、データとした。

今回収集した中国語訳のデータは、徐一平（2010）の分類方法を参考に、1.象声詞、2.副詞、3.形容詞、4.動詞、5.慣用句、6.脱訳、の6つに分類した。なお、品詞の判断については『現代漢語詞典』（第6版）を参考にした。

本稿は上記の分析材料を中心に考察を行うが、中国語の訳本に見られる擬音表現の特徴をより明確にするた

め、中国語テキスト『傾城之戀』（張愛玲著、皇冠叢書）にある擬音語の用例も一部引用し、中国語の訳本と比較することとした。

今回収集したデータの分布については以下の表の通りである。

4. 用例検討

まず、日本語の擬音語のデータについて分析する。原作『ノルウェイの森』では、擬音語に相当するものは68例が見られた。この68例の形態を表1にまとめる。

表1 日本語擬音語の形態

ABAB	ABっ	Aん	Aっ Aっ	ABん	ABん ABん	ABっ ABっ	特殊	合計
55	4	3	2	1	1	1	1	68

表1から、ABAB型（ごそごそ、くすくす等）は全体の八割（80.9%）を占めていることが分かる。一方、ABAB型以外のABっ型（どさっ、びしゃっ等）、Aん型（ボン、ボン等）、AっAっ型（ピッピッ、きゅっきゅっ等）、ABん型（ぱちん）、ABんABん型（どすんどすん）、ABっABっ型（コトッコトッ）、特殊型（ひゅううう）などの形式は合計で全体の二割弱（19.1%）を占めていることが分かる。

なお、以上の割合から、日本語の擬音語では、偶数の音節が反復する形で人間、動物の声や自然の音を表す傾向が見られた。次に、中国語訳との対応関係を見てみる。

表2 中国語訳との対応

	中訳A	中訳B	中訳C
象声詞	55	34	41
副詞	2	5	5
形容詞	3	4	4
動詞	0	1	0
慣用句	1	2	3
脱訳	7	22	15
合計	68	68	68

表2から、象声詞に訳されている例が各品詞の中で一番多く、全体の5割～8割弱を占めていることが分かる。そして、象声詞の次に、脱訳が各品詞の中で2番目に多くを占めていることが分かる。脱訳の定義について、先行研究では明確にされていないが、徐一平（2010：37）では、以下の用例を脱訳例だとしている。

(5)安田はそう言いながら、せかせかと勘定を払いに歩いた（松本清張、『点と線』）

訳本：安田一邊説著、一邊到櫃檯去付帳⁵

本稿は徐（2010）の用例を参考に、上例のような象声詞、形容詞、副詞や他の品詞を使用せず、擬音語の後に付く動作のみを翻訳する用例を脱訳とする。

以上の割合から分かるように、象声詞訳が多いことが中国語訳の特徴である。なお、脱訳が存在することとそれ以外のものがあるという2点も中国語訳の特徴だと言える。以下、3つの中国語訳で擬音語に対応するものとして1位、2位を占める象声詞訳と脱訳の例文を中心に検討していく。まず象声詞訳を見てみる。

4.1 象声詞訳

中訳A、中訳B、中訳Cに翻訳された象声詞訳の形式を表3にまとめる。

表3から、中国語の象声詞にはAABB（窸窣窸窣、滴滴答答等）、AA（咚咚、砰砰等）、ABB（咻鳴鳴）、ABAB（喀

表3 中国語の象声詞の形式

	中訳A	中訳B	中訳C
AABB	12	5	1
AA	12	14	17
ABB	1	0	0
ABAB	24	8	12
AAA	2	0	0
ABCD	0	1	2
A	4	4	7
AB	0	2	2
合計	55	34	41

啦啦、咕嚕咕嚕等)、AAAA (叩叩叩、啪啪啪等)、ABCD (嘩哩啪啦、劈哩啪啦等)、A (砰、咻等)、AB (嘍唻、嘩啦等) などのパターンがあることが分かる。しかし、使用頻度で並べれば、その上位3つはそれぞれ

中訳A：ABAB (24例)、AA (12例)、AABB (12例)

中訳B：AA (14例)、ABAB (8例)、AABB (5例)

中訳C：AA (17例)、ABAB (12例)、A (7例)

となり、三つの訳本に一番多く使用された象声詞の形式はそれぞれ異なることが分かる。

なお、今回収集した象声詞訳には、『重編国語辞典修訂本』では“状声詞⁶(象声詞)”として載せられているものと、“状声詞(象声詞)”としては載せていないが、象声詞の位置に現れ、尚且つ象声詞に類似する機能を持つものが見られた。本稿では、このような用例を“擬似象声詞”(以下、“ ”を外す)と呼ぶことにする。

以下、象声詞と擬似象声詞に分けて検討していくが、各訳本のうち、非象声詞の訳例には詳しく触れないことにする。

まず、象声詞の訳例を見てみる。

(1). 直子はくすくすと笑った

中訳A：直子就咯咯笑了起來

中訳B：直子咯咯地笑個不停

中訳C：直子「嘍唻」地笑出聲來

用例(1)の「くすくす」は笑い声として使われる擬音語である。ここで注目するところは、3つの中国語のうち、中訳Aと中訳Bでは「咯咯 (gege)」という連続の笑い声を表す象声詞に訳されているのに、中訳Cだけが「嘍唻 (pu chi)」に訳されている。中訳Cの「嘍唻 (pu chi)」は笑い声を表す象声詞であるが、突然笑い出す場合に使用されることが多い。原作の「くすくす」は「くすっ」という擬音語の繰り返し形であることから、「くすくす」は連続の笑い声を描写する擬音語だと考えられる。従って、1回きりの笑い声を表す「嘍唻 (pu chi)」と比べ、連続の笑い声を表す「咯咯 (gege)」の方が原作に近いと言える。

(2). 知らない女の子がぐうぐう寝ている

中訳A：身旁有個不認識的女孩子呼呼睡著

中訳B：有個女孩呼呼大睡

中訳C：一個陌生女孩在身旁酣然大睡

(2)の「ぐうぐう」は鼾の音を表す擬音語である。中訳Aも中訳Bも“呼呼 (hu hu)”という鼾を表す象声詞に訳されている。ここで注目するところは、「ぐうぐう」と“呼呼 (hu hu)”は意味だけではなく、母音も類似していて、つまり音韻効果に類似点が見られる点である。

一方、中訳Cでは、副詞の「酣然」に訳されていて、その用法は擬態語に相当する。さらに、3つの訳本のうち、2つは意味が同じ象声詞に訳され、尚且つ原文の擬音語「ぐうぐう」の母音が類似していることから、“呼呼 (hu hu)”は原文の「ぐうぐう」という擬音語にかなり近い表現であると考えられる。

以上に検討した象声詞は全て『重編国語辞典修訂本』でも“状声詞(象声詞)”として載せられている。

その一方、下記の用例(3)の中訳A“怦怦”と用例(4)の中訳C“框”は、辞書では象声詞としては載せられていないが、象声詞の位置に現れ、尚且つ音韻効果を持っている擬似象声詞である。

(3)体のずうっと奥の方から心臓の鼓動がコトコトッて鈍い音で聞こえて

中訳A：從身體的很深處可以聽到心臓怦怦鼓動的悶響

中訳B：從體內深處傳來咚咚的心跳聲 (130)

中訳C：體內很深很深的地方傳來心臓「砰砰」的跳聲

(3)の「コトコトッ」は心臓が鼓動する音を表す擬音語である。これに対して、『重編国語辞典修訂本』では、中訳Aの“怦怦 (peng peng)”を象声詞として載せず、心臓が鼓動するその様子を表す、という擬態語に相当する解釈のみが載せられている。その一方、“砰砰 (peng peng)”はドア、太鼓を叩く音に使用される象声詞で、中訳Cの場合では心臓が鼓動する音に使用されている。言い換えれば、中訳Aの“怦怦 (peng peng)”は、元々象声詞ではないが、動詞“鼓動”の前という象声詞が出現する位置に現われ、尚且つ象声詞の“砰砰 (peng peng)”の発音と同じため、擬態語から象声詞に転用された擬似象声詞だと考えられる。このような転用が発生する理由として、擬態語の“怦怦”は、象声詞の“砰砰”と発音が同じであることと、両者の漢字の形態が類似していることが挙げられる。即ち、“怦”と“砰”、この二つの漢字に含まれている“形(形態)”“聲(音声)”、という機能に共通点があるため、“怦”は擬似象声詞として使われていると言える。

一方、中訳Bの“咚咚 (dong dong)”は中訳Cと同じく太鼓を叩く音を表す象声詞である。3つの訳本では、2つは「peng peng」に訳され、1つだけは「dong dong」に訳されるが、両者の韻尾は同じ「ng」である。また、中国語では、一般的に“砰砰”と“咚咚”は両方とも心臓が鼓動する音を表す象声詞として使われているため、“砰砰”と“咚咚”は両方とも原文の「コトコトッ」に相当する表現だと考えられる。

(4)またガラガラと窓が閉まった

中訳A：喀啦喀啦把窗子關上

中訳B：喀啦喀啦地拉上窗子

中訳C：接著「框」一聲把窗關死

(4)の「ガラガラ」は窓を閉める際に、窓と窓枠が触れ合う擬音語である。それに対して、中訳Aと中訳Bでは、“喀啦喀啦 (ka la ka la)”に訳されている。『重編国語辞典修訂版』には“喀啦”という象声詞は載せられていない。しかし、“喀”は硬い物同士が触れ合う象声詞として載せられ、“啦”も歌声や歓呼の音を表す擬音語として載せられている。従って、“喀”と“啦”を合わせる形の“喀啦”も象声詞だと考えられる。さらに、“喀啦”は口語では膝や指の関節を鳴らす擬音や機械のエンジンの音が運転する擬音として使われているため、中国語に元々存在している象声詞だと思われる。

また、“喀啦”と原文の「ガラガラ (ga la ga la)」を比較して見ると、両者の発音と意味に共通点が見られる。従って、3つの訳本のうち、2つの訳本では“喀啦喀啦”に訳された理由として、“喀啦喀啦”の発音と意味が原文の「ガラガラ (ga la ga la)」に類似することが挙げられる。

一方、“框 (kuang)”は、『重編国語辞典修訂版』では象声詞として載せられていない。

ここでは、“框”を擬似象声詞に転用する理由について分析する。『重編国語辞典修訂版』によると、“框”の意味は窓枠である。従って、“框”は窓枠という普通名詞から窓を閉める瞬間に出た音を表す象声詞に臨時に転用された擬似象声詞だと考えられる。中訳Cの“框 (kuang)”のような擬似象声詞は中国語テキストにも見られる。

(5)他不再說話了,可是電話始終沒掛上。許久許久,流蘇疑心他可是盹著了,然而那邊終於撲秃一聲,輕輕地掛斷了。『傾城之戀』(張愛玲著、皇冠叢書 p217)

例(5)の“撲秃 (pū tū)”は電話の受話器を戻す際の擬音表現であるが、『重編国語辞典修訂版』では、“撲秃”は象声詞として載せられていないため、象声詞に臨時に転用された擬似象声詞だと考えられる。

つまり、例(5)の“撲秃”から分かるように、擬似象声詞は訳本のみならず、中国語テキストにも存在するものである。その理由は、表意文字として発達してきた中国語の漢字には、仮借と呼ばれる機能が存在しているためだと言える。中国の最古の漢字字典『説文解字』の著者である許慎は仮借という造字法について“仮借者 本無其字 依声託事”と言う。つまり、元々固有の文字がない時に、同じ発音の文字を探して来て転用した用法で

ある。従って、例(4)の中訳Cの“框”と例(5)の“撲秃”という擬似象声詞も中国語の造字法に合致するものだと考えられる。

しかし、例(4)の中訳Cの“框(kuāng)”は原文の「ガラガラ(ga la ga la)」に比べ、発音が完全に異なる上に、中国語でも一般的に“框”を象声詞として使用していない。つまり、“框”は象声詞との関連性が低いと言える。従って、中訳Cの“框”に括弧引用の「」と“一聲”という語も付けられることは、“框”を普通名詞から擬似象声詞へ転用する際に、音が出ていることを強調する手段だと考えられる。同じ現象は例(5)“撲秃”にも見られる。

さらに、擬似象声詞の後ろに括弧や“一聲”という語を付けたり、音韻効果を強調しなければならないことの根本的な理由は漢字の表意性に関わると考えられる。

表意文字である漢字には、一字・一語の原理が強く働き、ある語はある字を専有するものとなる。そのため、同じ字を仮借した場合、語の区別がつかなくなり、その結果、括弧や“一聲”という語を添加することによって語の弁別を計り、仮借によって臨時に生まれた擬似象声詞とその擬似象声詞を構成する文字に含まれている本来の意味とを区別するのだと考えられる。

以上、象声詞訳と擬似象声詞訳について検討した。その結果、3種の訳本のうち、2種以上の訳本に同じ象声詞が現れる場合、その象声詞は固有象声詞である場合が多い。また、日本語の原文と比べると、発音や音声に含まれているイメージに類似性が見られる。一方、擬似象声詞の“怦怦”“框”は2種以上の訳本に同時に現れない。さらに、“框”のような原文の「ガラガラ」の発音からかけ離れる上に、中国語でも一般的に象声詞として使われないものも見られる。その場合に、括弧「」や“一聲”という語を付けない状態では、象声詞として受け入れられない傾向が見られる。

上記の説明から、中国語訳本において、象声詞訳は固有の象声詞に集中する傾向が見られる一方、一般名詞が象声詞に転用する擬似象声詞には、様々な制限があるという保守的な一面が見られた。

4.2 脱訳

本稿は、下の用例(6)のような象声詞、形容詞、副詞や他の品詞を使用せず、擬音語の後に付く動作のみを翻訳する用例を脱訳とする。今回収集した脱訳の数は、中訳Aには6例、中訳Bには20例、中訳Cには12例であった。この数値から、脱訳は訳本によって大きく変わることが分かる。なお、脱訳をさらに日本語の擬音語に相当する象声詞がないものと、日本語の擬音語に相当する象声詞があるのに、訳者がそれを使用していないものに分ける。

まず、日本語の擬音語に相当する象声詞がない用例について検討する。

(6) 耳のあたりを**ぼりぼり**と搔いた

中訳A：搔一搔耳邊

中訳B：搔著耳朵

中訳C：出聲地搔搔耳畔

「ぼりぼり」はつめで物をひっかく音や硬い物を噛み砕く音を表す擬音語で、用例(6)の場合は前者の意味に相当するが、中国語には相当する象声詞が見当たらない。従って、中訳Aと中訳Bでは「耳を搔く」という動作のみが翻訳された。一方、中訳Cでは、「出聲地搔搔耳畔（音を立てて耳を搔く）」という風に、象声詞の使用を避けて翻訳されているが、その音の正体は不明確のため、やはり脱訳だと考えられる。

また、原作の「ぼりぼり」は平仮名で表されているが、片仮名の「ポリポリ」と異なる印象を受ける。即ち、片仮名の「ポリポリ」と比べ、平仮名の「ぼりぼり」には、音声のみならず、物事の様子も含まれている。一方、中国語にはそれに相当する象声詞がない上に、「ひらがな」と「カタカナ」のように、音に含まれるイメージを区別する機能が含まれていない。つまり、これは日中両国語の文字に含まれている機能による相違だと考えられる。

次に、中国語に相応しい象声詞があるのに、訳者はそれを使用していない用例について検討する。このような脱訳が現れる理由として、訳者の選択で象声詞を使用しないことが挙げられる。しかし、用例(7)の「拍」のような、動詞でありながら、象声詞の働きを兼ねるものも脱訳例が現れる理由だと考えられる。

(7) レイコさんがやってきて僕の頬を**びしゃびしゃ**と叩き

中訳A：玲子姊走過來啪啪地拍我的臉頰

中訳B：玲子來到我的身邊拍著我的臉頰

中訳C：玲子姊過來，在我臉頰「啪啪」地拍了兩下

用例(7)の「ぴしゃぴしゃ」は手で顔を続けて軽く打つ音を表す擬音語である。中訳Aと中訳Cでは象声詞の「啪 (pa pa)」に訳されているが、その意味は爆発音や物を打つ音である。一方、中訳Bでは、「叩く」に相当する動詞の「拍 (pai)」のみが訳されている。

しかし、象声詞の「啪」と動詞の「拍」、この2つの文字を比較してみると、両者の形は似ていることが分かる。また、中訳Bの「拍」は、動詞として使用されるが、『重編国語辞典修訂本』では、「拍」は象声詞「啪」の異体字であり、象声詞として使えるとされている。

言い換えれば、中訳Bの「拍」はここでは動詞として使われているが、発音は異体字の象声詞“啪”に類似するため、“啪”に似ている音韻効果も含まれていると考えられる。

次の(8)の中訳Bの動詞「擦」にも、象声詞に類似する音韻効果が含まれている。

(8). チョークでその先をキュッキウツとこすった

中訳A：用粉塊喀喀地磨一磨那前端

中訳B：用粉塊磨擦著尖端

中訳C：「嚓嚓」觸了幾下桿頭

(8)の「キュッキウツ」はきしむ音を表す擬音語である。中訳Aでは硬い物同士が触れ合う音を表す象声詞の“喀喀 (ka ka)”に訳されている。一方、中訳Bでは、「キュッキウツ」に相当する象声詞や形容詞が使用されず、「こする」に対応する複合動詞の“磨擦 (mo ca)” (磨きこする) のみが訳されるため、脱訳である。しかし、複合動詞“磨擦 (mo ca)”の後部“擦 (ca)”と中訳Cの象声詞“嚓嚓 (ca ca)”は、形が類似し、発音も同じである。瀬戸口 (1984: 3, 17) では、中国語の象声詞は動詞として使われることがあると指摘し、象声詞と動詞の機能はお互いカバーし合っているとした。従って、用例(7)の動詞“拍”や用例(8)の動詞“擦”には、動詞の機能のみならず、一部の象声詞の機能も働いていると考えられる。

以上の用例から、中国語には日本語の擬音語に相当する象声詞がないことは、脱訳が現れる理由の一つであると考えられる。しかし、日本語の擬音語に対応する象声詞があるのに、脱訳が現れる理由として、訳者が選択して象声詞を使用しない以外に、中国語の動詞には、象声詞に類似する音韻効果が含まれていることも考えられる。

5. おわりに

本稿は、日本語の小説『ノルウェイの森』に使用される擬音語とそれの3種の中国語訳本を通して、両国語の擬音語の対応状況を検討した。その結果、3種の中国語訳本では象声詞訳と脱訳がそれぞれ日本語の原文に使用される擬音語に対応する訳の1位、2位であることが分かった。さらに、象声詞訳例、脱訳例と原文を比較することによって、そこから2つの方向性を見出すことができた。

まず、象声詞訳に見られる日中擬音表現の相違を述べる。

中国語訳本において、象声詞訳は元々中国語では象声詞として使われているものに集中する傾向が見られる。また、普通名詞から擬似象声詞に転用した用法にも様々な制限を受けているという保守的な一面が見られた。つまり、中国語の象声詞は漢字の「表意」という機能に拘束され、漢字の本来の意味を無視して音声を模倣することが極めて困難である。

一方、日本語の擬音語は無意味の言語音である平仮名や片仮名で表すため、自由自在に音声を模倣する。さらに、擬音語を文字で表す際に、平仮名と片仮名という二つの選択ができ、音に含まれるイメージまでもを弁別することもできる。

つまり、両国語の擬音語を表す文字に含まれる機能の相違は、日中擬音表現の相違点となり、中国語の象声詞が日本語の擬音語より少ない理由に繋がっていると言える。

次に、脱訳例に見られる日中擬音表現の相違を述べる。

本調査では、脱訳の用例が多く見られた。そのうち、例(6)の「ぼりぼり」のような日本語の擬音語に相当する象声詞や形容詞、副詞などの品詞がないため、やむを得ず擬音語の後に付く動詞のみを翻訳する脱訳もあれば、

日本語の擬音語に対応する象声詞があるのに、象声詞が使用されていない脱訳もある。後者の場合、訳者が選択して象声詞を使用しないことはあり得るが、日本語の擬音語の後に付く動詞に対応する中国語の動詞は、象声詞に類似する音韻効果を持ち、一部の象声詞の機能が働いていることも脱訳が現れる理由だと考えられる。

つまり、両国語の文字に託される機能の差と、動詞の機能の相違は、日中擬音表現の相違点となり、それが中国語の象声詞が日本語の擬音語より数が少ない理由に繋がっていることが判明した。

以上、日中両国語の擬音表現について検討してきたが、擬態語については紙幅の関係で触れていない。しかし、日中両国語のオノマトベの機能や役割の相違を明らかにするには、擬態語の分析も欠かせない。今後は擬態語を含め、さらなる検討が必要であると思われる。

註

- 1 『暮らしのことは擬音・擬態語辞典』(2003: 1)
- 2 徐一平 (2010: 5)
- 3 徐一平 (2010: 41) では、「原文の擬音語と対応する象声詞もなければ、新しいものを考えるにも無理な場合がある。こんな時は、無理やりに訳文の中で、音声効果を出そうとするより、象声詞で訳すことを避けて、ほかの言葉で適当に訳した方が、訳文としてすっきりする」として、象声詞以外のもので日本語の擬音語に対応するのも可能であると指摘した。
- 4 可筑書房の訳本は中国の漓江出版社から、林少華氏の訳本の出版権を買い取り、繁体字で印刷され、台湾で出版されたものである。
- 5 原文は新潮文庫『点と線』、訳本は群衆出版社『點與線』による。
- 6 台湾で出版された辞書では、象声詞のことを“狀聲詞”として載せられているが、本稿では象声詞に統一する

参考文献

- 浅野鶴子編 (1978) 『擬音語・擬態語辞典』 角川書店
瀬戸口律子 (1984) 「『擬音語・擬態語表現 (日本語—中国語) について』 『大東文化大学紀要人文科学』 22号 pp.1-17
呉川 (2005) 『オノマトベを中心とした中日対照言語研究』 白帝社
山口仲美編 (2003) 『暮らしのことは擬音・擬態語辞典』 講談社
中華民国教育部国語推行委員会編 (1994) 『重編国語辞典修訂本』
中国社会科学语言研究所词典编辑室編 (2012) 『现代汉语词典』 商務印書館 (第6版、新装版)
徐一平 譙燕 呉川 施建军 (2010) 『日语拟声拟态词研究 日本語の擬音語・擬態語に関する研究』 学苑出版社